

展示を考える2

What Is a Museum Exhibition?

前号 (No,13) に引き続いて、来年度の展示にむけて活動中の作業班のメンバーの方々からの、展示への展望や提言をご紹介します。

博物館と体験学習

佐々木 長生 (福島県立博物館 専門学芸員 / 共同研究員)

Providing More Attractive Experiences at Museums

SASAKI Takeo

博物館における体験学習には、三つの方法があると思う。一つ目は「観る体験」、二つ目は「さわる体験」、三つ目は「学ぶ体験」である。これらの体験には、それぞれ観る人の年代と職業などの立場がある。博物館に勤務する私の立場から、これらの体験学習を見てみたい。

観る体験

観る体験は、主に幼児期や小学校時代である場合が多い。これは最初に博物館に行った体験である。見学・催し物などさまざまな機会がある。最初の博物館に対する印象が、その人物の博物館に対する印象を決めてしまうということもある。

福島県立博物館では、春の企画展「馬と人の年代記」を開催し、その関連行事として友の会の主催により、6月8日に周防猿回し会による「猿まわし」の公演を行った。午前・午後の2回の公演を行い、午前の部では博物館近隣の幼稚園児約250名を招待した。公演は2匹の猿により、竹馬乗りやジャンプなど周防猿回しの伝統芸である。一匹のベテラン的存在の猿は、一回で見事に芸をこなすが、もう一匹の小猿はなかなか芸を成功させられない。しかし小猿は一生懸命に芸に挑んでいる。いつしか園児たちからは「がんばれ、がんばれ」という熱い声援が湧きあがっていた。見事芸を成功させると、拍手と喜びの声が会場いっぱいに広がった。猿使いの人と猿、そして園児たちが一体となって会場は熱気に包まれていた。

私はこの光景を見て、園児たちが最初に見た猿回しの芸、これは生涯忘れられない体験になったものと見

写真1



猿まわしに集う園児たち

写真2



周防の猿まわし公演 (梯子乗り)



た。この感動の体験が博物館であったこと、猿まわしを見たという体験と感動、この時点では博物館の存在は薄くても、250人の園児たちの僅かでも博物館について関心を持つことになれば、この企画は成功と思った。その結果は、将来に期待したい。幼稚園児たちにとって博物館の展示は、理解するには多くの困難がある。しかしこのような博物館に接する機会やイベントを設けることも、これからの博物館の使命であろうと考えさせられた。

(写真1、2)

さわる体験

博物館の展示は触ることができず、静かに観るとするのが常識である。近年はハンズオンコーナーとして、レプリカや体験用の資料を準備し、触れるようにしている博物館が多い。しかし、観覧者のなかにはこれで十分納



福島県立博物館体験学習室ハンズオンコーナー
「化石にさわってみよう」
化石にさわって見る小学生たち

得する人は少ないのが現状である。福島県立博物館では、体験学習室にハンズオンコーナーを設け、自然・考古・美術・民俗などの各分野が担当している。民俗の場合は、雪国の履き物・かぶり物を準備し、その着用にあたっては、展示解説員が対応している。

体験学習室には、昔のおもちゃの遊び、古代の衣装や旅人の衣装の体験、鎧兜の着用などの体験ができるようになっている。また昔語りや紙芝居・機織りなどの実演による体験学習なども企画している。そのほか学芸員や展示解説員による縄文土器作り、おもちゃ作りなどの実技講座などを企画し、展示資料と同じものを、作ったりする体験学習を行っている。(写真3)

学ぶ体験

学芸員が研究を行うにあたって、体験は必要であると実感する。たとえば草鞋や籠を研究するにも、その知識はあるもののその製作技術は無い。製作方法など聞き取りでは詳細に記述されているが、学芸員は作ることができない。博物館においては、草鞋作りなどの実技講座が企画される。しかし、講師は外部の技術保持者に依頼せざるを得ない。こうした技術保持者も年々高齢になり、いつかは依頼も不可能となる。学芸員は、こうした事情に鑑み学芸員自らが技術体得に努めねばならぬと、私の経験から痛感している。技術を体得することにより、また新たな研究に発展することも期待できよう。私は、20年前に猪苗代湖畔の会津民俗館に勤務していた。冬期間は、約2メートルの積雪に悩まされながら、毎朝館内の除雪作業から1日の仕事が始まった。時には屋根の雪下ろしも行った。このとき、カンジキの装着やコウシキと呼ばれる除雪用具の使用方法について学んだ。こうした自らの体験が会津地方のカンジキや除雪用具の研究には、大変有効であった。次いで、その製作方法なども使用体験ある私にとっては、どこに力が加わるのかなど、聞き取りの注意も注がれた。こうしたことも学芸員にとっては、大切な「学ぶ体験」でなかろうかと実感する。

また学芸員と研究にとって大切と思われる体験につい

Formerly, in Japan, many museums were places of serious education.

There sat precious materials and plates that showed magnificent explanations;
the visitors had to view them silently. The air was serious and grand.

The atmosphere of this place of education was filled with dignity from top to bottom.

Only a little amusement was permitted at places of education. For some people,
the word museum is synonymous with boredom.

These past 50 years, museums have been trying to completely change this.

Museums have, through trial and error, become more attractive and enjoyable.

て、私の経験からもう一つ紹介したい。それは、昭和48年夏に会津民俗館内に南会津地方の古民家を移築復元したときである。この民家は、「旧馬場家住宅」で国の重要文化財に指定され、保存公開されている、私はこの民家の解体から復元にいたる作業に携わり、大工や屋根葺き、左官などの職人の手伝いを行いながら、その伝統技術をつぶさに観察することができた。いっしょに汗を流しながらの観察と聞き書きは、私にとり何よりの調査となった。そのなかで土間のタタキ製作は、粘土に塩(ニガリ)をまぜ、これを槌でたたきながら固める作業は、私の仕事となった。土間は二ワと呼ばれその家の顔といわれ、

農作業や夜割仕事の大切な場であった。この製作を担当し、できあがったときの喜びは今でも忘れられない。こうした体験が、後の民家研究において大いに参考となった。

以上、私の経験から博物館における体験学習について紹介した。民俗学を専門にする私にとって、民俗技術などの体験学習は今後の研究にとっても重要であることを痛感しており、その体得を目指している。まさに、非文字資料としての民俗技術の体得である。学芸員自らこうした体験を生かした博物館活動を行っていく必要を感じている。

「昔のくらし」の展示すること

青木 俊也(松戸市立博物館 学芸員/COE教員)

The Making of New Exhibitions of Past Cultures

AOKI Toshiya

はじめに

このニュースレターの6号で「展示における昔を考える」と題して、小学校4年生の社会科のカリキュラムに関連させた学習資料展、いわゆる「昔のくらし」展において、どのような時代を展示しているのかを考えてみた。この展示は、今日では失われてしまった生活の知恵や技を生かして自然環境を利用していたくらしを出発点に、現在に至る身近な生活の歴史を対象にしている。そのなかで表現される「昔のくらし」が、地域の古老や祖父母世代が経験した戦前のくらしから、父母世代が経験した戦後のくらしへと時代設定の比重を移していることを述べた。そこには、この十数年間「昔のくらし」展が開催され続けている状況のなかで、子どもに昔を伝える身近な大人の生活経験の推移が要因となっていることを考えた。このような生活経験の変化は、歴史系博物館において戦後生活の資料を収集対象にし、その結果、家電製品を備えた昔のくらしを表した戦後生活再現展示という新たな動きをつくり出している。

それでは、博物館において展示されたテレビが置かれていなかった戦後生活以前の「昔のくらし」は、どのような時代の生活を表しているのだろうか。

野外博物館における民家の生活再現展示

さて、「昔のくらし」を再現した展示における具体例の一つとして、野外博物館における民家の生活再現展示を挙げることができよう。この写真(1、2)は、スウェーデ

ンのストックホルムにある1891年に設立された世界最初の野外民家博物館であるスカンセンで展示されたくらし(兵士の家)を写している。伝統的な家屋を中心にその屋敷、耕地、家畜なども含んだ生活環境と、そこでの生活者に扮したスタッフの活動を混じえた生活の姿が再現されている。スカンセンの生活再現展示は、リビングヒストリーミュージアムとして多くの影響を他国の博物館に与えたと指摘されてきている。

この国の本格的な野外民家博物館は、戦前において日本民族博物館の野外展観が計画され、今和次郎によってスカンセンを模した鳥瞰図が作成されたがその時にはつくれず、戦後になってから日本民家集落博物館などによって実現されたことが知られている。現在、40数館を数える野外民家博物館のなかで、実際規模の一軒の家屋敷として、主(母)屋、付属屋を配置した屋敷地、さらに周辺の耕地を揃えた生活環境を再現した館は、1986年に開館した千葉県立房総のむらまで待たなければならなかったと私は考えている。それまでの一般的な傾向としては、各館で独自の生活環境の整備を行っていること、移築する民家の位置する散村と集村の屋敷地の違いを踏まえても、屋敷地全体ではなく、主屋を単独で移築していることが多かったのは確かであろう。

それでは、なぜ、主家が単独で移築されたのだろうか。もちろん、各館の敷地面積、予算規模などの経済的な要因による影響が大きいと考えられ、その理由は個別に検